

異世界の吟遊詩人の宿
屋に転生した元ソムリ
エの Ω カントが吟遊詩
人 α に「お前の過去も
未来も全て俺のものだ
」と Ω を隠していたこ
とがバレて酒場の地下
室で番にされる話

「お……っ♡」

地下貯蔵庫の湿った空気。蠟燭の灯りがひとつ。酒樽に背を押しつけられたまま、リュカは自分の口から漏れた声が信じられなかった。

「——半年、待った」

エルドの低い声が鼓膜を揺らす。顎を掴む指の力が強い。逃がさないという意味が、肌越しに灼ける。

「お前、 β じゃないだろう」

「……っ」

首筋に鼻先を押しつけられる。深く、執拗に——吸い込まれる。リュカのソムリエの鼻は嫌でも嗅ぎ取ってしまう。エルドの身体から滲む α フェロモン。白檀と鉄錆と雷雨前の重たい空気。脳幹を直に撫でるような匂いに、カントの奥がじわり♡と疼いた。

（だめだ……嗅ぐな。嗅ぐな、この匂いを——）

「抑制薬草の匂い。ずっとしていた。最初にこの宿に泊まった夜からな」

襟元を掴まれ、引き裂くように開かれる。ボタンがひとつ、石畳に転がった。

「 Ω の匂いがする。——この首筋から」

「離せ……っ！」

振り払おうとした手首をあっさりと片手で掴まれ、酒樽の縁に押しつけられる。 α 特有の膂力。リュカの腕ではびくともしない。

「嗅ぎたくて仕方なかった。半年間、毎晩お前のワインを飲みながら——本当に嗅ぎたかったのはこっちだ」

舌が、首筋を舐め上げた。

「ンっ……♡♡ やめ……っ♡」

項腺の上を、濡れた舌先が這う。ぞわり♡と全身の毛穴が粟立った。腹の底で、何かが疼く。股の間——前世には存在しなかった器官が、 α フェロモンに反応して芯から熱を帯びていく。

「お前の Ω の秘密、この宿の客全員にバラしてもいいんだぞ」

血の気が引いた。 Ω だと知れたら——客の信用が、半年かけて積み上げた全てが崩れる。

「……何が、望みだ」

唇を噛んで問う。声が震えていた。

エルドが笑った。蠟燭の光に照らされた藍色の瞳が、飢えた獣の色をしていた。

「お前の全部」

＊

三日前——

銀の葡萄亭に叩きつけるような雨が降っていた。

交易路が泥濘にまみれて旅人の足が止まり、酒場は満席に近い。リュカは一階のカウンターでグラスを磨きながら、朝から続く身体の不調に眉を顰めていた。

微熱。身体の芯が甘く痺れる感覚。——前世にはなかったこの疼きが何を意味するか、もう嫌でも分かっている。

（発情期が……近い。今月は薬草が効いてくれると思ったのに）

抑制薬草の耐性が年々上がっていた。最初の一年は月に一度の服用で済んだものが、今では毎朝欠かさず飲んでも効きが薄い。

「リュカ、今夜の銀の雫はいつもより華やかだな」

カウンター端の定位置に座ったエルドが、グラスを傾けながら言った。壁に立てかけたリュートの指板に雨粒が光っている。

「……雨が続くと気圧の変化で醸造中の樽が呼吸するんだ。それで香りが変わる」

前世のソムリエの知識がつい口を衝く。この世界の誰にも通じない理屈を、エルドだけはいつも面白そうに聞いていた。

「お前の話は不思議だ。まるで別の世界のワインを知っているかのようだ」

リュカの指が一瞬止まった。何気ない言葉なのに、核心を突かれた気がして心臓が跳ねる。

エルドが弾き語り 시작했다。旅の恋歌—— α が運命の番を見つける物語。低くて甘い声が酒場に満ちる。リュカの耳朶を内側から震わせるように。

(……っ、何だこれ。こいつの声に身体が反応して……)

雨の湿気がフェロモンを増幅していた。リュートの弦を弾く指から、歌う喉から、微かに漏れる α の匂い——普段なら気にならない濃度のそれが、今夜は脳の奥を甘く焼く。

ワインを注ぐ手が震えた。赤い雫がグラスの縁を外れ、白い指を伝う。

「おい、大丈夫か。顔が赤いぞ」

「……何でもない」

慌てて厨房に逃げ込み、抑制薬草を追加で口に含む。苦い味が舌を灼いた。

(……前世では男だった。ワインの香りを嗅ぎ分ける鼻だけが取り柄の、平凡なソムリエだった。それがこんな身体に——)

股の間に在るものを、転生してから五年、一度も触れていない。見たくもない。認めたくもない。男の自分にカントがあるという事実が、五年経った今も飲み込めない。

なのにそのカントは今、エルドの歌声ひとつで疼いている。

翌日、雨はまだ止まなかった。

「今夜の演奏で使う曲を選ぶから、ワインの味に合う曲を教えてくれ」

エルドがカウンターに身を乗り出した。距離が近い。リュカはグラスを間に挟んで応じた。ワインの話になると饒舌になるのは元ソムリエの性分だ。ぶどうの品種、土壌との相性、酸味と甘みのバランス——語り出すと止まらない。

エルドは興味深そうに聞いていた。——少なくとも、そう見えた。

指がグラスの脚で触れ合った。一瞬。わざとではないような——しかし避けなかった。

全身を甘い電流が走り抜けた。

「——っ」

息を飲む音を、エルドは聞き逃さなかった。

「どうした。顔色が悪い」

「……何でもない」

引いた手の指先が痺れている。カントの奥がきゅん♡と締まった。触れてもいないのに。たった指先が掠めただけで。

(……やめろ。こんなの、ただの α フェロモンへの生理反応だ。こいつに——こいつになんか——)

エルドの藍色の瞳が、リュカの引いた手を追っていた。ゆっくりと、鼻を鳴らした。

雨が上がった朝。三日目。

リュカは地下貯蔵庫で抑制薬草を磨り潰していた。石臼で丁寧に潰し、口に含む。苦い粉末が喉を焼く——その直前の、薬草が口に入るまでの数秒。

抑制が解けた。

Ωのフェロモンが、一瞬だけ地下に漏れた。

甘く、重く、熟した果実のような——リュカ自身のソムリエの鼻が嗅ぎ取るほどの濃さで。

背後の階段に、足音はなかった。

しかしリュカは知らない。エルドがそこにいたことを。甘い匂いを全身で浴びた瞬間、喉の奥で唸りを上げ——しかし音を立てずに階段を戻ったことを。

震える拳を握り締めながら、口元だけで笑っていたことを。

＊

時間が冒頭に追いつく。

「——お前の全部」

酒樽に背を押しつけられたまま、リュカは歯を食いしばった。

「黙っていてほしければ、条件がある」

エルドの声から感情が消えた。情報屋の交渉の声。

「明日から俺がこの宿にいる間、お前は俺の言うことを聞け。俺が求めたら——その身体を差し出せ」

「……この、外道が」

「外道？ お前の方がよっぽど外道だ。βのフリをして客を騙し続けてきた嘘つきが」

二つ目のボタンが弾け飛んだ。シャツの合わせが開き、薄い胸板が蝋燭の灯りに晒される。

「Ωの身体だな」

エルドの視線が胸に止まった。男の胸なのに、微かにピンク色に尖っている。

「っ……見るな……っ」

三つ目のボタン。腹部が露出した。へその下に、淡く青い紋様が浮かんでいた。

「発情紋か。——もうヒートが始まりかけてるんじゃないのか」

認めたくない。なのに、紋様が脈打つたびにカントの奥が疼く。身体が裏切っている。ずっと裏切り続けている。

シャツが肩から落ちた。上半身が裸になる。白い肌に蝋燭の影が揺れた。

「ソムリエの手だな。指が綺麗だ」

リュカの手を取り、指先に唇を寄せた。舌が指の腹を舐め上げる。

「ッ——やめ……っ♡」

「お前の指からは、まだ今朝の薬草の匂いがする。甘草と月桂花。——だがその下に、お前自身の匂いがある」

舌が指の間を這い、付け根まで舐め上げた。ソムリエの繊細な指を、味わうように。

(だめ……っ♡♡ 指を舐められただけで、カントが……っ♡♡)

股の間が、じわりと熱い。何も触れていないのに蜜が滲む。 α フェロモンが鼻腔を灼くたびに、五年間封じ込めてきた Ω の身体が軋みを上げて目覚めようとしている。

ズボンの紐に指がかかった。結び目がゆっくり解かれる。「ここから先は、お前が『やめろ』と言っても止めない。止めてほしければ——上に叫べ。客が助けに来る。ただしお前が Ω だと知れ渡るがな」

叫べない。叫べば全てが終わる。

ズボンが太腿を滑り落ちた。白く細い脚。男にしては柔らかな曲線を描く内腿が、蠟燭の灯りに晒される。

「柔らかいな——ソムリエの身体にしては」

指が内腿を撫でた。反射的に脚を閉じようとする、エルドの膝がそれを阻んだ。

下着に手がかかる。

「ッ——待て、それだけは……っ」

「カントがあるかどうか。これが最後の証拠だ」

ずるりと下着が下ろされた。

沈黙が落ちた。

リュカの股の間に——男性器ではなく、閉じた淡い色の縦筋がある。カント。Ωの証。

「……これがお前の、本当の身体か」

エルドの瞳孔が開ききっていた。しかし意志の力で抑え込んでいる。支配する側が理性を失うわけにはいかない——藍色の瞳が、ぎりぎりて獣を繋ぎ止めていた。

指先が、閉じたカントの表面に触れた。

「お……っ♡♡」

声が漏れた。反射的に口を塞ぐ。だめだ。声を出すな。感じてることを知られるな。

（たった触れただけで——っ♡♡ カントが……五年間、一度も触ってないのに……っ♡♡）

「Ωのカントは、αに触れられると開くと聞いたことがある」

指がカントの割れ目を上からなぞった。ゆっくりと。一度ではなく、何度も。

「ジ……っ♡♡ やめ……触るなっ♡♡」

閉じていたカントが、αフェロモンと指の刺激に応じてほどけ始めた。恥辱だった。自分の意思では一ミリも開いたことのない場所が、この男の指ひとつで——

透明な蜜が、割れ目の隙間から滲み出した。

「匂いが変わった」